乳房超音波検査にて、判断に苦慮した１例

◎丸山 夕貴[1)]、尾花 康子[2)]、八木 佳奈[2)]、岩田 育子[3)]、今川 昇[2)]
一般財団法人京都工場保健会[1)]、一般財団法人 京都工場保健会[2)]、京都工場保健会 宇治支所[3)]

【はじめに】当施設の乳房超音波検診受診者は、2023 年度は年間 45,727 名の受診であった。日々の多忙な検査から多いように感じていたが、全国の受診率は 24%程度であった。乳がんの罹患率は増加しており、9 人に 1 人が乳がんと言われている。今回乳がん検診にて、判断困難で稀な症例を経験したので報告する。【症例】70 歳代女性。【既往歴・家族歴】子宮摘出、腸閉塞、母乳がん。【検診歴】7 年前に、乳房超音波検診を受診され正常範囲であった。今回、至急精密検査となり外来を受診された。【外来所見】超音波像は、境界明瞭粗雑でハローのようにも見え、後方エコーが減弱～無であった。カラードプラで、血流は認められなかった。FLR は 4.04 であり悪性を疑う所見と考えた。マンモグラフィは、R1/L1 と異常は認められなかった。超音波画像より、悪性所見を否定できず他院に紹介となった。【病理所見】core needle biopsy にて cholesterin granuloma （コレステロール肉芽腫）と診断された。【考察・まとめ】コレステロール肉芽腫は、異物巨細胞に囲まれたコレステロール結晶を含む線維性顆粒組織からなる。乳腺コレステロール肉芽腫の発生機序においては、乳管拡張が基盤のあるのではないかと考えられている。乳管周囲の慢性炎症が脂肪に富む管腔内物質の移動が亢進した導管異常と、静脈炎に伴って乳管の壁の損傷が起こり、出血、コレステリン結晶検出しコレステロール肉芽腫を形成していくのではないかと考えられている。乳房のコレステロール肉芽腫の一番の問題点は、乳がんとの鑑別が難しい事である。それ故、文献では外科的切除または切除生検が多く行われている。今回の症例は、後方エコーが無エコー像であり、粗大石灰化とも考えたがマンモグラフィには写っていなかった。また境界の粗雑な部分もあり、ハローにみえるような部分もあり、違和感を感じたが悪性を否定できなかった。【結語】乳房超音波検査で、コレステロール肉芽腫が画像上で乳がんと鑑別を要した 1 例を経験した。また、健康診断において、乳房超音波のみならず、マンモグラフィの併用検査による重要性を改めて感じた。

一般財団法人京都工場保健会　075-823-0527